

## 北脇論文審査報告

アメリカ社会には、人種的マイノリティが、主流社会への同化を目指すために、その集団の構成員が、「リスペクタブルであること（リスペクタビリティ）」をきわめてジェンダー・スペシフィックに要請してきた歴史がある。北脇論文は、1910年代から日米開戦（1941年）までのロサンゼルス日系アメリカ人社会における女性を中心としたビューティ・カルチャーの形成に焦点を当て、そのユニークなビューティ・カルチャーが日系アメリカ人女性および日系アメリカ人社会全体にとってどのような意義を持っていたかを考察するものである。

アメリカ、とくにカリフォルニア州において日系人社会が形成され始めた1910年代から、その社会が崩壊する1941年までの日系アメリカ人社会の変化は、差別・排斥を含むアメリカ社会の動きを反映すると同時に、アメリカを目指した移民が後にした日本の変化にも対応していた。本論文は、その点に着目し、それら二つの変化の影響を受けて、日系人社会のビューティ・カルチャーが形成された過程を分析し、その意義を考察している。

その分析・考察に見られる新しい視点・視座と評価すべき点は3つにまとめられよう。

1. ビューティ・カルチャーを、アメリカ社会における日系人の「居場所」の探求、つまり文化的市民権獲得の方策の一つとみている点。本論文は、とくに1920年代、30年代において日系人女性がアメリカ社会における基準に沿った美を追求したことは、この社会に「ふさわしい」、すなわちリスペクタブルな外見を追求したことであり、それは、彼女ら、そして日系人全体のアイデンティティの形成と関わっていたと論じる。つまり、日系人社会の構成員にとって、ビューティ・カルチャーは、白人を中心とするアメリカ社会において自分たちがどのような立場や地位にいるのかを確認する——つまり自分たちの「居場所」を確認する——ために重要であったという考察である。アメリカ社会には人種・エスニック上のマイノリティが、主流社会への同化を目指すために、その構成員にリスペクタビリティを要求してきた歴史がある。本論文は、日系人社会をその例として分析している。

著者の分析では、ビューティ・カルチャーを、単に人が美しくあるために化粧法、ヘアスタイル、洋服を選ぶ、時代の風潮を取り入れる、といったことだけではなく、アメリカの主流社会に受け入れられるための方策であったとしている。たとえば、日本から移民した女性が上陸後すぐ着物を捨て、洋服を着たことは、その方策の一つだったことを、著者は指摘する。

「居場所」を求める、つまりアメリカ主流社会に受け入れられることを目指す方策としては、教育レベル向上や経済的地位の上昇など、日系人が努力し成功した分野は多く、それらの研究は日系人研究の中心的テーマでもある。また、最近の日系人研究は、歴史、文学、社会学、文化人類学などの分野にとどまらず、芸術、医学、スポーツなどの分野でも扱われ、国際的な共同研究も進んでいる。しかし、ビューティ・カルチャーを中心に据えた研究は新しいものであり、日系人研究への本論文の貢献といえよう。

2. 日系アメリカ人女性のビューティ・カルチャー形成にアメリカと日本の間のトランスナショナルな文化の流れが影響しているという事実に注目したことも、本論文の独創性を評価できる点である。日系人はアメリカ主流社会に受け入れられることを目指してアメリカにおける美の基準を取り入れようと、アメリカ社会におけるビューティ・カルチャー関連の情報を求めたが、同時に日本から送られてくる情報にも敏感であった。そして、日本からの情報は日本におけるアメリカ文化の強い影響を反映していたがために、日系人は、アメリカ主流社会の美の基準をアメリカにいて直接認識すると同時に、日本を経由して把握することができたのである。この興味深い事実は、日系アメリカ人社会のビューティ・カルチャーの重要な特色を示している。日系人は、日本に対する絆を否定することなくアメリカ社会における「ふさわしい」外見を追求することができたのであり、日系人のアイデンティティが、アメリカか日本かという二者択一ではなく、トランスナショナルな文化の流れのなかでハイブリッドに形成されたとする著者の論はきわめて示唆的である。

具体的に言えば、とりわけ衣服、髪型、美白など外見のかつ可変的な要素に着目し、1910年から1940年までのアメリカ社会において日本人/日系人女性に求められた外面的な美の規範が、当時のアメリカにおける美の規範と、同時代の日本で女性に求められた美の規範との双方の影響を受けて形成されていたことを、日米双方の新聞・雑誌などの一次史料を丹念に読み解いて立証している。こうした規範を踏まえて形成された日系アメリカ人女性の美容文化を、著者は、単に主流社会の模倣として捉えるのではなく、大正デモクラシー期以降日本社会が積極的に取り入れた近代文化としてのアメリカ文化を日本から逆輸入する形で、同時代の日本における美意識の影響下にあるものとして捉え直すことを主張する。このようにトランスナショナルな文脈で日系アメリカ人女性の美容文化や美意識をナショナルな枠組みを越えて位置づけたことは、日系アメリカ人史をめぐる学術研究に本論文が果たした重要な貢献である。

3. また、トランスナショナルな流れそのものではないが、関連した日系人社会の特

色として、アメリカの価値観と日本文化における価値観の重なりがあったことが、本論文で指摘される。たとえば、裁縫は日本文化にあった良妻賢母思想で女性が習得すべき技術であったが、同じ時代のアメリカ社会で構築されていた「真の女性らしさ」として求められているものであった。同時に、たとえば、日系人社会が目指した外見の「改善」は、当時の「アメリカ化運動」と重なっていた。本論文の主題の分析のなかにみられるこれらの指摘はきわめて示唆に富む。ここに、著者が日系人社会内部の動きをナショナルな、さらにトランスナショナルな動きとの関連で読み解こうとする視点がみられる。つまりより広範に、さらに、重層的な視野で日系人研究を展開する試みを示す一例と言える。

さらに、2に挙げた点につながるが、第4章の二世クイーンの選抜に見られるように、日系アメリカ人のアイデンティティは、アメリカ主流社会で重視される価値観・規範と日本文化を基盤とする価値観・規範とのバランスの上に築かれたとする分析も興味深い。これにより、日本の、そして日系人の文化がアメリカ社会に認識され、日系人の肯定的なアイデンティティ形成にもつながったとみるのである。二世クイーンコンテストをテーマにした研究はすでにあるが、このような新たな視点から分析を試みた本研究は独創的であり、本論文が果たした当該研究分野への貢献度は高いと言える。

今後に向けての課題としては、以下の点が挙げられる。

1. 本論文では女性のビューティ・カルチャーを扱ったが、女性を中心に考察した場合に、それで日系人社会全体の特色を示すことができるかどうかを、見極めることが必要であろう。このことは、女性が日系人社会で果たしていた役割を明快にすることにもなり、日系人研究へのさらなる貢献になると思われる。

2. ビューティ・カルチャーは、アイデンティティ形成に重要な意味を持ったということだけではなく、日系人コミュニティにおけるビジネスとしての発展にもつながり、女性がそれを消費社会の中で企業家として活用し、社会に参画する機会を切り拓いたとする著者の考察は洞察に富む。これは、女性が私領域において果たした役割だけではなく、公領域における女性の地位の上昇をも視野にいれた研究につながるものである。本論文ではジェンダー論を踏まえた考察は十分にはなされていないが、このような切り口の研究は今後の日系人研究の発展に寄与していくものとなるだろう。

3. 本論文で用いた資料は、本論文のテーマを分析するために必要なものであったと理解しているが、それで十分であったか、さらなる探求・分析が求められよう。たとえ

ば、日系人社会では日本語新聞が主な情報源ではあったにせよ、アメリカ社会の情報源である英字新聞は、日系アメリカ人のビューティ・カルチャー形成に、そしてアイデンティティ形成に、どのような影響を及ぼしたのか、分析することにも意味はあろう。

4. 本論文は、分析の対象となる期間を1910年から1940年までと定めたことで、日系アメリカ人史において大きな転換点となる第二次大戦期以前の美容文化や美意識を抽出することを試みた。日系アメリカ人の美容文化や美意識が、日系アメリカ人史において重要な意味をもつ強制収容の時代を経てどのように変化あるいは維持されたのかという、さらなる研究への布石としても重要な論考であると言える。

#### 審査結果

審査委員会は、本論文が上記の通り、十分な資料に基づき実証的な研究を行っている点で、学術論文として高い水準にあること、また先行研究を踏まえつつ日系人研究にトランスナショナルな新たな角度から、ハイブリッドなアイデンティティ形成等に分析を加えている点で、当該分野に貢献するものと判断した。これをもって、申請者に博士(文学)の学位を授与することを全員一致で決定した。

2016年9月25日

論文審査委員	(主査) 津田塾大学	教授	高橋	裕子
		教授	大類	久恵
		教授	池野	みさお
		名誉教授	飯野	正子